



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	北海道大学総合博物館ニュース
Author(s)	諏訪, 正明
Citation	北海道大学総合博物館ニュース, 4
Issue Date	2001-07-01
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59423
Type	book
File Information	hakubutsukan04.pdf





THE HOKKAIDO UNIVERSITY MUSEUM NEWS

北海道大学
総合博物館ニュース

憧憬の博物学



幼い頃は博物学者であったと回想する人も多いことでしょう。虫を捕らえ、綺麗な石を探し、それなりのコレクションを作ったことでしょう。土器の破片を見つけたばかりに考古の世界に入ってしまった方もいるかも知れません。山野に恵まれた子供達だけが自然を友としたものではありません。都会でも社寺の境内には樹木が茂り、それなりの藪もありました。セミ時雨けたたましく、カミキリムシも捕まえばキキイと首筋を鳴らしたものです。化学洗剤のなかったころの生活排水はメダカや小鮒をおびやかしてはしませんでした。移入種アメリカザリガニは茹で上げられて、貧しい子供達の貴重なおやつとなりました。

瑞穂の国とも秋津洲ともよばれるこの島国の呼称からは、たわわに実る稲穂の上を飛翔するあきつ(トンボ)の群が浮かびます。弥生時代の銅鐸表面には様々なモチーフが見られますが、トンボ、カマキリ、クモなど、捕食性の節足動物も描かれております。イネの害虫を食べてくれる益虫との認識があったと理解されます。

千年近くもの昔に「虫愛づる姫君」がい

ました。「花や蝶など美しいものだけを愛でる気持ちが分からない。本当の姿を知ることこそ大事だ」と言って、毛虫など“よるづの虫のおそろしげなる”を飼育し、その成長変化する様を楽しんだということです。「人はつくろってはいけない」とも言って、眉も抜かなければ歯も染めなかったということで、父君大納言殿の嘆きや如何ばかりと同情を禁じ得ませんが、この姫君こそ真のナチュラリストであります。

森羅万象に知的興味を抱くひとはいつの世にもいたことでしょう。生活上の必要に迫られてその知識の活用が求められ、本草学の発展がありました。大航海時代を経た欧米のNatural Historyの伝統は、近代日本に博物学を定着させ、南方熊楠のような巨人も現れました。その後、博物学はさまざまな専門分野に分かれ、いま、物知り博士は大勢いても、一人の研究者が博物学者を名乗ることはありません。“博物館ものだ”との表現はあまりよい意味では使われません。知のユニバースとしての総合博物館に科された使命は大きく重いと自覚しなければなりません。

北海道大学総合博物館は2年前に設置され、小泉前館長のもとでスタッフは多くの汗を流して参りました。建物の改修工事は半ばではありますが、大きく飛躍する基礎固めは順調に進んでおり、すでに地球惑星科学分野ではモデル展示を先行させ、好評を得ております。この秋には全学の叡智を集めて、本学創基125周年の式典に合わせた記念展示が、博物館の改修済みの部分を利用して公開されま

す。本学の歴史、精神、教育・研究の過去、現在、未来が多くの資料とその解析結果によって示され、語られます。全館改修後には、収蔵学術資料や、専任スタッフおよび学内教官の研究に基づいた、より専門性の高い展示がなされます。収蔵資料は新たな視点から研究されてこそ価値が高まります。学内外の研究利用に一層の貢献ができるよう態勢も整えます。そのためには資料部の先生方はもとより、全学のご支援を戴かねばなりません。皆様のご理解と励ましをお願い申し上げる次第です。

諏訪 正明
(館長/昆虫体系学)

目次

- ページ1: 憧憬の博物学
- ページ2: 資料部長あいさつ/カムチャツカは北海道から遠くない!
- ページ4: サハリン州郷土博物館の課題と今後の展望
- ページ5: 研究部活動紹介2: 日本の暖海性海藻の起源を求めて
- ページ6: 公開シンポジウム/標本貸出し・データベースのお知らせ/創立125周年記念展示/初代小泉館長退官
- ページ7: ミュージアムネットワーク2: 森林資料館/博物館実習の記録
- ページ8: 博物館教職員/訪問外国人研究者/主な出来事

July 2001

ISSUE 4

2001年7月発行

北海道大学総合博物館

資料部長 あいさつ

資料部の業務は、研究部の教官だけでは専門分野をカバーしきれないために、学内外からの学術標本及びそれらに係る研究成果の情報収集を支援することが最も重要であると思われます。総合博物館は平成14年度に第二期の改修工事に入ることが予定されており、この改修によって本格的な総合博物館がほぼ完成し、北海道大学の各部局に保管されている多数の学術標本とそれに付随する学術情報が博物館に移管されることになると思います。なかでも、学術的価値の極めて高い標本は、本学の財産というよりは、むしろ世界の財産というべきでしょう。タイプ標本や重要な論文に使用された標本は、日本国内は言うに及ばず、世界各国から再検討及び近縁種との比較のために借覧の申し込みがあるうかと思えます。

また、近年PCR法の開発によって微量の生物標本からDNAが抽出できるようになったこと、高磁場の核磁気共鳴装置(NMR)を使用して薬効のある微量成分(各種アルカロイド類などの有機化合物)や環境汚染物質(ベンツピレンなどの発ガン物質)などの構造解析が可能になっ

たことで、学術標本の利用価値が飛躍的に増大し、遺伝学、育種学、有機化学、医学、薬学、環境科学などでの多分野での活用が可能になりました。しかし、学術標本を多面的に有効に活用するためには、質的な劣化を防ぐ保存法を確立しなければなりません。生物の乾燥標本でいえば、その保存法は、太陽光を遮断し、照明装置は全て紫外線をカットし、温湿度を調整し、防虫対策を施す等の共通した措置の他に、さらに工夫をこらす必要のある生物のグループも予想されます。また、乾燥標本以外の液浸標本については、恒久的な保存が可能な固定・保存液や包埋剤の開発も行う必要があるかと思えます。

多面的活用を図るためには、良好な状態で保存・保管されている学術標本を体系的に整理し、その情報をデータベース化して公開する必要があります。生物関係で申しますと、生物多様性に関するデータを地球規模で全ての人が自由に利用できるようにするため、世界中の生物多様性に関するデータの編集、リンク化等の実施・調整を行う国際的な調整機構として「地球規模生物多様性情報機構



(Global Biodiversity Information Facility: GBIF)」の設立準備が進められています。研究部の教官だけでは多くの学術標本と情報の体系的整理・データベース化は困難であり、資料部の支援が必要になります。

2年間の任期中に、改修によって総合博物館の施設が整備されると同時に開始される学術標本と学術情報の移管を積極的に支援していくことと、資料部としての活動の基本方針を確立することに微力ながら努力したいと考えております。皆さま方のご協力をお願い申し上げます。

増田 道夫

(資料部長 / 海藻系統分類学)

カムチャツカは北海道から遠くない！

北海道とカムチャツカ、札幌とペトロパブロフスク・カムチャツキー。これら2地域、そして二つの行政の中心都市間には多くの共通点がある。自然自身が内的類似性を示しているし、その物理的な近さは千島列島の花輪によって繋がれている。カムチャツカから北海道に至る千島～カムチャツカ海溝に沿って、大小の島々(千島列島)が点々と1,400kmの長さにわたって列なっている。日本の最北端に位置する北海道、そしてロシアの中でも最も辺境の地のひとつであるカムチャツカは、太平洋沿岸において最も近い隣人となった。東京でサクラが、モスクワではリンゴの花が咲き(そして散る)ころ、札幌の街路はいまだ雪に覆われ、ペトロパブロフスクではその雪が溶ける頃だろうか。類似した厳しい気候・自然環境、千島～カムチャツカ島弧に共通の地質構造と背景、開拓の歴史、そしてさまざまなこれ以外の共通点が、カムチャツカと北海道を、ペトロパブロフスクと札幌を結び付けている。もし1,400kmほどしかない千島列島に沿って飛んでくれば、ペト



Gorevly 火山の酸性(pH=0.7)火口湖

ロパブロフスクと札幌との近さは実感できるだろう。札幌から九州の福岡や鹿児島への距離よりも300-500kmは短いのだから。

カムチャツカは環太平洋火山帯の最も大きな部分(単位)のひとつである。そこには非常に巨大な220の、そして比較的小さな2,100の第四紀の火山がある。そのうち30は常に活発な活動をしている火山である。なかでもクリウチェフスカヤ火山(Kliuchevskaya: 4,750m)はヨーロッパ～アジア地域において最も高く、最も活動的な火山である。カムチャツカの活火山は年間およそ2億トンに達するさまざまな噴出物を地表にもたらし、その量は世界中の年間火山噴出量の14-15%にも相当している。

カムチャツカは地理的にも全体として47万2,300平方キロを占める広大な地域である。北から南まで緯度から言えば、レイキャビクやトロンハイムからキエフやブリュッセルにいたる、全長1,600kmにわたる地域であり、半島の最も幅広いところは470kmにも達する。それは槍の穂先のような形の半島部(カムチャツカ半島)と大陸部(コリヤークア、チュコトカはコリマとともにアジアの最北あるいは極東部として知られる)から成っている。



Mutnovskoe 地熱地帯 (手前は建設中の地熱発電所、後方右は Mutnovsky 火山、同左は Gorely 火山)

その沿岸はオホーツク海とベーリング海、そして太平洋によって洗われている。そしてここにはアジアの主要な地熱資源がある。つまり11以上の最大級の高温システムとおよそ300の温泉が存在する。ロシアの熱水、ミネラル・ウォーターの約75%がカムチャツカに存在する。14,100の川や小川、約10万の湖、そして414の氷河は新鮮な飲料水資源でもある。カムチャツカの東岸に沿って、ウスト・カムチャツクから東京までは地震学的には最も活発な地帯であり、それは狭いベルトとして伸びている。大変強い地震がこの地帯の典型である。ここでは150年毎に、大変強く甚大な被害をもたらす地震が繰り返しておきている。

カムチャツカは鉱物と鉱床の巨大な展示場とも言える。ここには固体、液体、ガスからなるさまざまな鉱床が多数存在する。金、銀、白金の推定埋蔵量からはカムチャツカはロシアでも1, 2を争う鉱産地域である。1994-2000年には15,000kgのPGM(白金族鉱物)が産出された。総量で金400トン、銀2,000トンを含む12以上の鉱床が、採掘を待っている。

カムチャツカの最も大きな天然ガス鉱床のひとつであるクシュスコエ

(Kshugskoe)からのガスパイプライン・プロジェクトが進んでいる。パウゼトカ(Pauzetka)にある地熱発電所はもう30年以上も稼働している。カムチャツカの人口の85%が住んでいるペトロパブロフスク・カムチャツキーとエリソヴォの中心部からそれほど遠くないところに位置するムトノフスカヤ(Mutnovskaya)地熱発電所(計画出力容量1万kw)の建設のため

Kamchatka is not far from Hokkaido

にヨーロッパ復興開発銀行が9,900万ドルの貸し付けを行っている。

天然資源の開発がこの地域の経済的特徴といえる。カムチャツカの産業はあの特徴的な鮭の群れ、有名なキングカムチャツカと言われるカニ、クロテン、キツネ、シカ、森林、海洋資源といったものを含んでいる。今日、漁業はこの地域で35万人が生活できるだけの予算を生み出している。人口密度が大変低く(1平方キロあたり1人以下)、85%は町に住んでおり(カムチャツカにはわずか3つしか町はなく、最も大きいのがペトロパブロフスク・カムチャツキーである)、道路交通網は極端に悪く、インフラは完全に欠落しているのがカムチャツカの典型的な特徴である。これは経済的に発展している大陸地域から距離的に極めて離れていること、そしてV. Atlasovのコサック軍隊の進軍が1697-1699年から始まったように、半島の開拓が比較的遅れたことなどに一部は拠っていると思われる。このような事情から、カムチャツカの主要な独特の自然環境は原始のままで守られたと言えよう。これが、カムチャツカが独特で地球上で類例を見ない地域と言われる所以でもある。

このような訳で、現在のカムチャツカは昨日のあるいは70~100年前のカリフォルニアやコロラド、ユークンに似ていると言える。つまり大規模産業の支配前であり、ゴールドラッシュや鉱業の急速な発展の前の第一段階であると言える。カムチャツカの生物多様性はその地理的な位置によって特徴付けられており、植物相や動物相においては多くのユニークな種類とレッドブックに掲載される希少種などで代表される。

1996年、ロシアの独特の自然として、バイカル湖とカムチャツカの火山がユネスコの世界遺産に登録された。1996年12月の世界遺産に関するユネスコ委員会の第20回会議で、クロノツキー州生物圏保護区、南カムチャツカ州保護区と3つの公園が世界遺産に含められた。世界遺産に登録されたカムチャツカの地域は現在、総計3万44Km²にのぼる。カムチャツカの自然の保全は、ロシアにとっても世界にとっても重要な課題であることがお分かりいただけるだろう。

地理的にも歴史的にもカムチャツカと北海道は隣人である。これは運命とも言える。我々は良き隣人関係を発展させなければならないし、それは我々相互に恵



Shiveluch 火山の大噴火(2000年5月7日)

みをもたらすはずである。まず大学間で、博物館の間で、研究者グループ間で、そして指導者間での協力から始めよう。学生や大学院生も先生や指導教官とともにカムチャツカ・北海道の共同科学研究に参加しよう。未来は現在から始まる。カムチャツカは科学・経済・観光分野での関係がますます発展することを期待し望んでいる。＜原文は英語。研究部の高橋・松枝が訳出した。＞

Victor M. Okrugin
ビクター・オクルーギン
(客員教授/鉱床地質学・鉱物学)



Shiveluch 火山噴火(右中写真)で発生した火砕流

サハリン州郷土博物館の 課題と今後の展望

サハリン州郷土博物館は、極東ロシアにおける人文科学研究者にとって最も古い研究機関のひとつです。人類学、自然史、地域史、教育学といった分野で著名な研究者が博物館スタッフです。現在、研究者が25名、スタッフは30名あります。20万以上の標本や文化遺産を保管しており、これらは極東ロシアと北太平洋諸島における歴史を記録した貴重な資料となっており、毎年7万人以上が古代史、民族学、歴史、動物学、植物学、地学、古生物学等に関する展示を見学しています。我々は日本やアメリカの博物館や研究機関との間で研究協力をおこなっており、博物館



研究者はロシアや外国の基金によって支援される民族学や考古学関係のいくつかの研究プロジェクトを提案してきました。博物館スタッフによる出版物も外国研究者の間で広く普及しておりカタログ、モノグラフ、年報 Vestnik Sakhalinskogo Museya および Izvestiya Instituta

Naslediya Bronislava Pilsudskogo などが 있습니다。また、サハリン州郷土博物館に関する情報はインターネットでも公開しています (<http://museum.sakh.com/eng>)。

サハリン州郷土博物館は樺太庁(1905-1945)の博物館として1937年日本政府によって建設された古い建物です。この建物は特別のデザインと装飾を内外に施した東洋建築様式で建てられたものであり、実際のところ今日においてはこの美しい建物は歴史的、文化的、建築学的に言ってもロシアにおけるモニュメントとなっています。ただ不幸なことに60年以上にわたって改装されることなく、建物の外観は悪化し厳しい状態となっていました。それでも我々はこのユニークな建物を博物館として持ち、それを保存していくことを光栄に思っています。伝統的あるいは新しい技術でこの古い建物を改修することが我々の第一の課題です。

もうひとつの課題は展示に関することで、それには新しいデザインや展示ケース、空調やコンピューター化が必要と

なっています。展示ホールのデザイン等も新しくしていくことが求められています。博物館のコレクションや科学的な成果に触れられるよう、すべての来館者が、展示や博物館データベースを備えたコンピューターにアクセスできるようにしなければなりません。すべての来館者が、博物館に来て新しい知識を探索する機会を持てるようにしなければなりません。海洋と太平洋諸島の形成の時代から現代の人類社会にまで至る、地球の自然史を分かりやすく示すのはコレクションそのものです。この意味で、博物館は特徴的な遺物を展示したり、一般の人々により理解されやすい科学的研究をおこなったりすることになります。

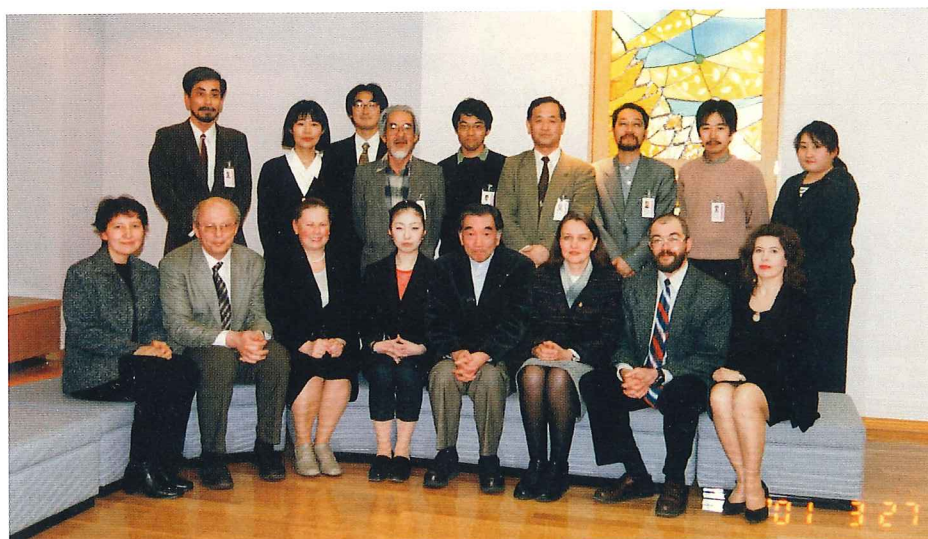
もうひとつの重要な課題は、博物館の多様なコレクションの修復や保管を担当する研究室の組織化の問題でありさらに展示ホールの環境維持や安全面をどのように向上させるかといった問題です。世界中の博物館がコレクションの保管管理については問題を抱えているでしょう。我々は将来にわたって貴重なコレクションを損傷や劣化から守らなければなりません。

21世紀初頭を迎えて、我々サハリン州郷土博物館スタッフはこれら諸課題を克服すべく準備をおこなっています。そのための能力・経験が我々博物館スタッフには十分備わっていると確信しています

神話の世界で描かれたように—それは先住民族の見方ですが、この大きな魚のような形をした島サハリンは、新しい発見を求めて、博物館共々大海へと泳ぎ出します。＜原文は英語。研究部の高橋が訳出し、天野がチェックした。＞

Tatyana Roon

(サハリン州郷土博物館・副館長)



手前右から3人目がタチアナ・ローン女史。4番目は小泉格前館長。

増田道夫資料部長が研究代表をつとめる『マレーシアの海藻の系統分類学的研究』に研究分担者として参加した。当プロジェクトは本学を中心に九州大学・長崎大学・京都大学・マラヤ大学の海藻学者による共同研究として平成9年度から11年度にかけておこなわれたもので、9年度はマレー半島西岸、10年度はボルネオ島、11年度はマレー半島東岸において、海藻の調査・採集をおこなった。上述の大学以外の研究者にも、採集した材料の同定などで研究協力者として加わっていただいた。とくに最終年度には漸深帯の採集ならびに緑藻の同定担当として榎本幸人神戸大名誉教授にご同行いただいた。筆者は10年度と11年度の調査隊に加わった。

日本の沿岸にはこれまで知られているだけで約1,400種の海藻が生育するが、これらは日本近海に一樣に分布しているわ



船上でのソーティング風景。中央は増田資料部長。

けではない。黒潮や対馬暖流に沿った分布を示す暖海性の種、親潮の影響を受ける海域にしか生育しない寒海性の種、というように、特徴的な分布様式を示すものが多い。これらのうち暖海性の海藻種群は、その起源がインド洋や南西太平洋の熱帯域にあると思われ、祖先形質を持った種群がこれらの海域に存在している可能性が高い。そのため、わが国の暖海性海藻の系統分類学的研究には、日本近海に生育する種だけではなく、これら熱帯域の海藻種群の知見が不可欠である。しかし、これらの海域の海藻フローラは、近年までは十分に明らかにされていると言える状況ではなかった。このような背景から、増田教授らのグループはこれまで平成2年にフィリピン、平成4年から6年にかけてベトナムにおいて調査を行い、多くの成果を上げている。今回調査したマレーシア海域は、マレー半島とボルネオ島のサバ・サラワク両州の他に無数の島嶼を含み、岩礁、ラグーン、湾、入江、マングローブや珊瑚礁などの多様な環境条件の沿岸線は4,932 kmに達する。太平



紅藻 *Halymenia durvillei* Bory de Saint-Vincent (ジョホール州シブ島)

洋とインド洋の接点に位置することもあり、両海域の海藻フローラの関係性を調査するのに非常に重要な意味を持つ。

筆者がおもに担当した紅藻イギス科では、いくつかのマレーシア新産種を確認したほか、ハワイから新種として記載された *Anotrichium celianum* Abbot et R. Norris が *A. tenue* (C. Agardh) Nägeli のシノニムではなく独立種であることが、今回マレーシア産の両者の詳細な検討により明らかになった。薫田智博士(北大・先端研)らによる紅藻テングサ科の研究では、日本産の種群とマレーシア産種群との比較検討および分子系統解析によって、未確定であった日本産4種の分類学的位置を確定したほか、二次的仮根の特徴がテングサ目の系統を反映した形質であることを明らかにした。紅藻イバラノリ科を検討した山岸幸正博士(北大・理学研究科)は、日本産の種群とマレーシア産種群との比較検討および分子系統解析により *Hypnea charoides-valentiae* complex の実体を明らかにし、新種 *Hypnea flexicaulis* Yamagishi et Masuda を記載した。その他にも紅藻ムカデノリ科(川口栄男博士、九州大)、褐藻カヤモノリ科(小

亀一弘博士、北大・理学研究科)、褐藻ホンダワラ科(鰐坂哲朗博士、京大)、紅藻マサゴシバリ科、コノハノリ科、フジマツモ科(増田教授)等、研究分担者それぞれの専門分野において数多くの新知見が得られた。とりわけフジマツモ科のソゾ属においては鈴木稔博士(北大・地環研)の協力により、多数の新規化合物を見出すとともに、化学成分の情報を加味した系統分類学的研究により、興味深い知見を数多く得ることができた。また、研究分担者に専門家がない分類群についても、紅藻オゴノリ科は寺田竜太博士(高知県海洋深層水研究所、現鹿児島大)、緑藻イワブタ科は大葉英雄博士(東京水産大)の協力を得て、多数のマレーシア新産種の報告を含む新知見を得ることができた。これら2分類群は食用等の資源海藻としても価値が高く、地元マレーシアの産業的振興にも寄与することが期待される。

これら多数の研究のもととなった海藻は、マラヤ大学など関係機関収蔵分を除く大半を、証拠標本として、そして将来のさらなる研究材料としての利活用に備え、本学で収蔵管理している。本学は昆布漁業の盛んな北海道に位置することなどから札幌農学校時代より海藻の研究が盛んで、所蔵する海藻標本は、質量ともにアジアでも随一の規模を誇るものであるが、熱帯域の標本についてはミクロネシアのものがほとんどであった。しかし今回のマレーシアを含む一連の調査・採集により、東南アジア海域の標本も非常に充実したものとなり、アジアにおける海藻分類学の中心的役割としての重要性がますます深まった。総合博物館の責任も増したことを肝に銘じたい。

阿部 剛史
(研究部助手/海藻分類学)



テレンガヌ州での採集の様子。サンゴを傷つけぬよう慎重におこなう。

総合博物館第3回公開シンポジウム
「北方圏・北東ユーラシアの
鉱物資源と熱水活動」
(Mineral Resources and Hydro-
thermal Activities in the North-
ern Region and Northeast
Eurasia)

総合博物館では、平成13年3月14日(水)百年記念会館大会議室において、第3回公開シンポジウム(表記タイトル)を開催しました。本シンポジウムは、総合博物館2代目客員教授(H12.11.6~H13.7.28滞在予定)で、現在ロシア極東部(特にカムチャッカ半島・シベリア東部など)の活発な火山活動に伴う熱水作用とそれに付随する鉱床形成過程、およびそこでの鉱物学的研究を精力的に実施・展開しているビクトール M. オクルーギン教授(ロシア科学アカデミー極東支部、火山研究所部長)を中心にして、道内外および国外から多数の研究者が参加して実施された国



際シンポジウムです。

本シンポジウムは、21世紀の人類に大きく科せられた資源問題の解決を念頭に、北方圏・北東ユーラシアに広く分布する豊富な地下鉱物資源とそれらの形成に深い関わりをもつ熱水活動に焦点を絞り、北海道を始めとした日本・ロシア・中国・モンゴル・韓国などの各国における最新の研究成果の公表と討論を行うことを目標として開催されたものです。また今回は、本シンポジウムの趣旨に賛同した産業経済省地質調査所北海道支所、道立地質研究所、北海道資源地質研究会の協賛を得て運営されました。

参加者はロシア・日本を始めとし、中国・モンゴルからの参加者も加えて約40余名となり、全日(9:20~18:00)を通じての口頭発表(11件)、ポスター発表(14件)および総合討論が英語・日本語の二ヶ国語で実施されました。そこでは、活発な討論と今後の国際的共同研究の展開に関する提言も行われ、多大な成果を得ることができました。また、シンポジウム終了後に開かれた懇親会の席上でも、さらに熱心な議論が継続されると共に、参加者による国際共同研究計画の立案に関する意見交換も行われるなど、実り多い国際シンポジウムとなりました。

松枝 大治
(研究部教授/鉱物・鉱床学)



標本貸出し

(1999年4月1日~2001年3月31日)
考古学部門

礼文町香深井A遺跡のヒグマ頭骨1点と骨製クマ偶像4点など(国立歴史民俗博物館の企画展示『北の島の縄文人—海を越えた文化交流—』(2000年6月20日~9月10日))

地学部門

デスモスティルス気屯標本の実物部分骨格15点を含む、デスモスティルス化石等合計27点(福島県立博物館の第2回企画展示『怪獣パレオパラドキシア—熱帯のふくしまに生きた謎の化石動物—』(2000年7月15日~9月10日))

生物学部門

陸上植物オトギリソウ属標本25枚(英国 Natural History Museum, Vickery 博士、分類研究のため)(1999年10月22日~)

陸上植物千島列島産オランダイチゴ属標本10枚(ドイツ Botanic Garden and Botanical Museum, Berlin-Dahlem, Staudt 博士、分類研究のため)(2000年6月15日~)

菌類標本 *Exobasidium* 属標本6点(筑波大学農林学系長尾英幸助教授、分類学研究のため)(2000年10月19日~)

陸上植物シロネ標本36枚(北海道教育大学旭川校西川恒彦教授、分類学的研究のため)(2001年1月30日~3月9日)

本学創立125周年記念展示

現在、『企画展示専門委員会』のもと総合博物館南側1階を使用しての記念展示の準備が行われています。本年9月27日~10月3日の記念ウィークのオープン後もこの展示が一般公開されることになります。3階の先行展示と併せて、総合博物館の展示はより充実することになります。ご期待ください。

データベースのお知らせ

総合博物館標本データベース『地球惑星科学分野標本』のうち鉱物、化石、地質標本・現象3分野のウェブ公開を2001年3月25日より開始した。URLは下記のとおり。

化石: <http://data-sv.museum.hokudai.ac.jp/fossils/>

鉱物: <http://data-sv.museum.hokudai.ac.jp/minerals/>

地質標本・現象: <http://strati.sci.hokudai.ac.jp/Geology/>

初代小泉館長退官

本館の初代館長小泉格教授(理学研究科)が本年3月をもって定年退官いたしました。



「エンレイソウ」での集合写真。

森林資料館



森林資料館は森林を対象とするあらゆる学問分野の研究資料の蓄積と森林に関する教育および啓発活動の推進のために1977年に苫小牧地方演習林に設立されました。展示室は1階と2階にわかれ、1階には鳥類や哺乳類の剥製や毛皮、演習林などで採集した巨大な丸太、菌類標本、岩石標本など自然史関連の展示がなされています。2階は林業機械・器具・木材・木製品など森林と人間のかかわりあいに関する文化・民俗学的な展示になっています。資料館の吹き抜け部分や大型標本ケースの板壁と調度も、北海道の代表的

な樹種を使い分けて作製されており、それら自体も教材としての役目を果たしています。

資料館には講義室、研究室、作業室、暗室などのスペースもあります。講義室は各種の研修や学生実習、研究会、一般向けのシンポジウムに利用されています。また、研究室は研究者に開放され、苫小牧研究林等で採集された昆虫類の標本を製作するのに使われています。現在、苫小牧市博物館の協力のもとに昆虫のインベントリーを作製しており、なかでもマクロレピ（大型鱗翅目）については北海道の9割以上の種（約2,000種）を収集しています。これら昆虫のインベントリーは、いずれ広く研究者が利用できるようにする予定です。

資料館のまわりには低木類を植栽した灌木園があります。また、苫小牧市民の水源地でもあり、名水100選にも選ばれている幌内川河畔には親水公園も整備されています。これらは資料館とは対照的に生きた教材として活用されています。週末などは野鳥観察や写真撮影などに訪れる市民も多く、自然に触れ合う場にもなっています。



森林資料館は2001年に農学部附属施設から、共同利用研究施設である北方生物圏フィールド科学センターに移行しました。これを機に苫小牧研究林の自然環境を背景とした教育・研究施設として、その機能をより充実させていく準備をしています。

森林資料館

所在地：053-0035 苫小牧市高丘
北海道大学北方生物圏フィールド科学センター苫小牧研究林

電話：0144-33-2171

ファックス：0144-33-2173

揚妻 直樹

（苫小牧研究林助手／動物生態学）

博物館実習の記録

当館としては2回目の博物館実習を8日間（2001年1月9-18日）実施した。実習生は昨年と同じく9名で、地球環境科学研究科の院生1名のほかは文学部生であった。ちなみに昨年度は文学部生5、経済学部生1、理学研究科院生1、地球環境科学研究科院生2名とやや多様であった。

初日のガイダンスと館長の講義および最終日の総合討論は全員一同に会しておこない、他は午前中講義、午後は2班にわけて各教官が実習指導をおこなった。

以下、総合討論で出た実習生の意見と教官側の見解を紹介する。

*** 評価できる点

1. 貴重な体験をできた。
2. 先に実習で資料に接してその分野の一端でも実感し興味をもったことは、つぎの講義の理解の助けになった。



3. 学部における博物館学の講義にはなかった理系の標本整理システム、データ化の講義は興味深かった。

*** 問題点

1. A・B班間で実習内容を交流させる機会がなかった。
2. 学芸員として博物館の現場で直面するであろう業務的ことから（資料受け入れ、展示・解説、普及、運営ほか）が実習内容にはぬけていた。
3. 実習生が実習内容を選ぶことはできないか。
4. 北海道大学総合博物館のかかえている問題も講義であつかえないか。
5. 理系の学部生はカリキュラムが過密なので在学中に博物館学関連授業を受講できない。また大学院では、修士論文提出期日が1月末なのでその直前の実習期間は負担が大きい。



*** 議論のまとめ

1. 各教官の専門研究という縦割りの観点からだけでなく、博物館における研究体制・運営の面における役割・実績という横断的・構造的な観点からの講義・実習をくわえてゆく（たとえば「情報メディア研究系」としてホームページ開設・維持、データベース構築など）。
2. 学部における博物館学の講義と実習の関係について学部教官側とさらに議論を深めてゆき、文系・理系のわくをこえた北大の博物館学をつくりあげてゆくことをめざす。さらにまたカリキュラム編成についても、全学的に特定の時間帯（たとえば月曜1講目）を博物館関係講義にあてるなどの措置をとるよう理解をもとめてゆく。

博物館教職員

(平成 13 年 6 月 1 日現在)

館 長

諏訪 正明 (農学研究科・教授)

Tel: 706-4505・2477 E-mail: suwa@res.agr.hokudai.ac.jp

研究部

資料基礎研究系

教 授 高橋 英樹 (研究部長)

Tel: 706-4508 E-mail: hide@museum.hokudai.ac.jp

助教授 天野 哲也

Tel: 706-3900 E-mail: amano@museum.hokudai.ac.jp

助 手 今村 央

Tel: 0138-40-5553 E-mail: imamura@museum.hokudai.ac.jp

資料開発研究系

教 授 松枝 大治

Tel: 706-2754 E-mail: matsueda@museum.hokudai.ac.jp

助教授 箕浦名知男

Tel: 706-2724 E-mail: minoura@museum.hokudai.ac.jp

博物館情報メディア研究系

助教授 大原 昌宏

Tel: 706-4506 E-mail: ohara@museum.hokudai.ac.jp

助 手 阿部 剛史

Tel: 706-4507 E-mail: tabe@museum.hokudai.ac.jp

資料部

資料部長

増田 道夫 (大学院理学研究科・教 授)

研究員

梶原 景昭 (大学院文学研究科・教 授)

佐々木 亨 (大学院文学研究科・助教授)

小杉 康 (大学院文学研究科・助教授)

渡邊 暉夫 (大学院理学研究科・教 授)

新井田清信 (大学院理学研究科・助教授)

菊地 武 (大学院理学研究科・助教授)

川村 信人 (大学院理学研究科・講 師)

三浦 裕行 (大学院理学研究科・講 師)

土屋 簗 (大学院理学研究科・助 手)

小林 英嗣 (大学院工学研究科・教 授)

宮永 喜一 (大学院工学研究科・教 授)

米田 哲朗 (大学院工学研究科・教 授)

小野 修司 (大学院工学研究科・助 手)

上田 一郎 (大学院農学研究科・教 授)

綿貫 豊 (大学院農学研究科・助教授)

吉澤 和徳 (大学院農学研究科・助 手)

藤田 正一 (大学院歯医学研究科・教 授)

仲谷 一宏 (大学院水産科学研究科・教 授)

矢部 衛 (大学院水産科学研究科・助教授)

大原 雅 (大学院地球環境科学研究科・助教授)

福田 正己 (低温科学研究所・教 授)

長嶋 和郎 (大学院医学研究科・教 授)

松田 彊 (北方生物圏フィールド・科学センター・教 授)

船越 三朗 (北方生物圏フィールド・科学センター・助 手)

増田 隆一 (先端科学技術共同研究センター・助教授)

小泉 格 (北海道大学・名誉教授)

大井 晴男 (北海道大学・名誉教授)

久万田敏夫 (北海道大学退官教官)

高井 宗宏 (北海道大学退官教官)

総合博物館訪問外国人研究者 (2000 年 10 月 1 日～2001 年 3 月 31 日)

オーリガ・シューピナ (ロシア: サハリン州郷土博物館研究員) 海外科研研究集会『サハリン考古学の今日』3 月 12 日「オホーツクエ 3 遺跡の調査について」

イーゴリ・サマーリン (ロシア: サハリン州郷土博物館研究員) 海外科研研究集会『サハリン考古学の今日』3 月 12 日「チルコーヴァ遺跡の調査について」

タチアナ・ローン (ロシア: サハリン州郷土博物館副館長) 当館との懇談会 3 月 27 日

平成 12 年 10 月 1 日から平成 13 年 3 月 31 日までの主な出来事

平成 12 年

10 月 4 日 第 2 回総合博物館研究部会・資料部会合同会議開催

10 月 12 日 全道高等学校理科研究大会高校生見学

10 月 19 日 第 11 回総合博物館教員会議開催

10 月 22 日～11 月 19 日 インドネシア ジャカルタ・ボゴール外

大原昌宏 (博物館情報メディア研究系) 陸産節足動物の生態調査採集

10 月 27 日 西安建築科技大学学長一行見学

11 月 21 日 第 10 回総合博物館運営委員会開催

11 月 27 日 札幌国際大学 博物館見学実習

11 月 28 日 総合博物館門標除幕式

12 月 13 日 第 12 回総合博物館教員会議開催

12 月 20 日 第 11 回総合博物館企画展示専門委員会開催

平成 13 年

1 月 9 日 博物館実習 (1 月 18 日まで)

1 月 15 日 第 11 回総合博物館運営委員会開催

1 月 25 日 第 12 回総合博物館企画展示専門委員会開催

1 月 27 日～2 月 5 日 アメリカ パークレー・ツーソン

箕浦名知男 (資料開発研究系) 恐竜化石関係研究打ち合わせ等

2 月 7 日 札幌市立北 9 条小学校特別クラブ活動博物館見学

2 月 9 日 第 13 回総合博物館教員会議開催

2 月 12 日～2 月 16 日 ロシア ユジノサハリンスク

天野哲也 (資料基礎研究系) サハリンにおけるオホーツク文化集団の形成と変容に関する資料調査等

2 月 15 日～3 月 7 日 インドネシア・マレーシア ジャカルタ・サンダカン外

大原昌宏 (博物館情報メディア研究系) エンムムシ標本調査

2 月 19 日 中国教育部中国大学教職員訪日代表団見学

2 月 27 日 第 14 回総合博物館教員会議開催

3 月 1 日 第 13 回総合博物館企画展示専門委員会開催

3 月 13 日 第 15 回総合博物館教員会議開催

3 月 14 日 総合博物館第 3 回公開シンポジウム開催

3 月 21 日 第 12 回総合博物館運営委員会開催

3 月 22 日 第 14 回総合博物館企画展示専門委員会開催

3 月 27 日 小泉格館長送迎会及びサハリン州郷土博物館副館長タチアナ・ローン女史との懇談会

3 月 31 日 小泉格 総合博物館長 任期満了

事務局

理学研究科・理学部事務長 佐々木重之

理学研究科・理学部事務長補佐 鈴木 光夫

理学研究科・理学部専門員 浅野志のび

専門職員 (総合博物館担当) 横山 栄紀

E-mail: yokoyama@jimu.hokudai.ac.jp

総合博物館事務掛長 田川 諭

E-mail: s-tagawa@jimu.hokudai.ac.jp

総合博物館事務掛 佐藤 永晃

E-mail: hsatou@jimu.hokudai.ac.jp

事務補助員 古田 未央

E-mail: furuta@museum.hokudai.ac.jp

事務補助員 村井 恵

E-mail: murai@museum.hokudai.ac.jp

北海道大学総合博物館ニュース 第 4 号

北海道大学総合博物館ニュース

発行日: 2001 年 (平成 13 年) 7 月 1 日

発行者: 諏訪正明

発行所: 北海道大学総合博物館

住所: 060-0810 札幌市北区北 10 条西 8 丁目

電話: 011-706-2658

FAX: 011-706-4029

E-mail: museum-jimu@museum.hokudai.ac.jp

http://www.museum.hokudai.ac.jp/